

# ラグビーと新ルール

## Rugby and a new rule

1K05A068

指導教員

主査 寒川恒夫先生

岸本 大路

副査 石井昌幸先生

私は高校からラグビーを続けており、現在は早稲田大学ラグビー蹴球部という体育会のラグビー部に所属している。せっかく約七年間もの間、ラグビーという一つのことを頑張ってきたので、ラグビーについての卒業論文を書こうと思った。

また、今年になっていきなり国際ラグビーフットボール協会から13項目ものルール変更があった。ラグビーのルール変更はほぼ毎年のように行われていた。しかし、13項目もの数がルール変更されるのは10年、20年に一度のことである。私は疑問に思った。まず一つ目はこのルール変更でラグビーはどのように変わってしまうのだろうか、二つ目はなぜルールを変更しなければいけないのか、と考えた。

この二つの疑問を明らかにしたいと考え、卒業論文を書いていきたい。

### 第1章

現在、日本ではまだラグビーという競技はサッカーや野球に比べ人気もなく、一般的にルール等も知られていないのが現状なので、ここではまずラグビーの概略について説明している。

### 第2章

ここではどのようにルール変更されたのか書いている。また、それに伴いどのようなプレーが出来るようになったのか、旧ルールとの違いも説明している。

### 第3章

ここでは新ルールと旧ルールの違いによって、

ラグビーがどのように変わっているのかプレー面や選手の考え方など書いている。

### 第4章

ここではルール変更の理由や、ルール変更がなぜこの時期なのかなど、新ルール実施の裏側を書いている。

### 結章

このルール変更により、ラグビーは大きく変わったと言える。しかし、国際ラグビーフットボール協会が描いていた華々しい攻め合いを増やして、よりスペクタクルなラグビーという青写真とはかけ離れており、実際は「キッキングゲーム」と呼ばれるキックの駆け引きが主流になってしまうラグビーへと変わってしまった。

確かにオンプレーの増加や、モールからのトライは減少し、国際ラグビーフットボール協会の思惑通りになった。しかし、トライの数は減少し、ペナルティ・ゴールの数が増加した。また、積極的なパス展開を奨励する「自陣22メートル内に自ら戻した球を直接タッチに蹴りだした場合、地域獲得は認められない」という条文で、ピンチを脱するためのタッチキックに制限を加えた。ところが、各チームとも自陣から攻めるリスクを抑え、キックの蹴りあいを選択しがちである。これによりラグビーの醍醐味である激しいプレーが減り、ラグビーが「地上戦から空中戦」へと変わっていった。私自身プレーをしていてキックばかりのラグビーにつまらなく感じます。しかし、国際ラグビーフットボール協会が23項目中、13項目しか変更しなかった。もし、

23項目変更していたらこのようなラグビーにはならなかったのではないかと思います。

ただルール変更1年目ということもあり、この試験的ルールでラグビーのゲームがどのくらい変わるというのは、ほんの表面的にしかわかったに過ぎなかった。我々選手も手探り状態であったことと、試験的ルールに対応する時間がなかった。もし、対応する時間があつたら、違った形にもなったかもしれない。また、この試験的ルールは2009年11月に国際ラグビーフットボール協会の理事会で、

正式決定を行う。その時に国際ラグビーフットボールが一番変更したかった、ラック内で手を使う行為がどのようになるのか、そのときヨーロッパの国々はどのような対応をするのか注目である。

ラグビーという競技はどんどん進化していく競技である。数年後にはまた、違った戦い方が生まれてくるであろう。どのように進化していくのかも注目であり、私の思いとしてはキック中心のラグビーにはなってほしくないと願いつつ、卒論を終えようと思う。